

## 7月23日の水害を体験して

近 藤 寛 (長崎大学教育学部地学教室)

雨が激しく降っていた午後7時10分頃、長崎大学前で長浦行のバスに乗車した。バスは雨による車の渋滞でなかなか進まず、1時間ほどかかって道の尾についた。そこでは、道路を流れる濁った水が歩道の上まで溢れていた。次のバス停の横道付近では、大井手川が氾濫していて、道路上に放置された乗用車が今にも流されそうな状態であった。バスはここを無事通過できたが、長崎市と時津町界の打坂で9時頃に前の車は動かなくなった。ここは峠付近であるため、道路に水はほとんどない。それで車は動かなくても、道路は歩けるだろうと思って数人の乗客と共にバスを降りて歩きはじめた。ところが時津側に下るにつれ、道路上は思いもよらない程の勢いで水が流れていて、横断した際は足元がすくわれて、今にも倒されそうであった。水のない所を伝い歩きをして、やっとの思いで元村の満本商店にたどりついた。そこには、勤め帰りの人と近所の人が10数人集まっていた。そのなかには、家の裏山が崩れたので避難してきたと生々しい話をしている人もいた。店の裏も崖であり、流れ出す水が店内に入り込んで、ここも安心できる所ではない。しかし、この店のラジオにより、長浦岳で153mm/時の大雨であること、琴海町でバスが窓まで浸水していること、また水に流されたり、崖崩れによる各地の死者や行方不明者の数は100~200人に達するらしいことなどを知った。いま降っている雨で、このような大災害が進行しているのを知り、外を歩くのは大変危険であると判断することができた。

避難して無事であることを自宅に連絡するため、店の公衆電話を2回ほどかけ直すと電話は

つながった。家の方は何事もないが、近くの道路のマンホールは水圧のためフタがはずれているので注意をとの話であった。

避難している間には、時津川が下流で氾濫していること、すぐそばの国道206号線が道路下の時津川の侵食により大きく決壊したとの緊迫した話も入ってきた。

夜11時をすぎると、雨は小降りになってきた。地元の人が時津川の氾濫水も引いているだろうと言うので、私は外にでて、所々に崖崩れによる土砂が積っている道路を歩いて時津に着いた。波止場横の商店には、50cm程の高さの所に浸水した跡があり、氾濫水は余りにも速く増加したため海に流出できなかったのだろうと思われた。

時津・久留里をすぎて釜島につくと、何台もの車が止っていて、先頭車の前では、崖崩れにより積った土砂を、二人の男が泥まみれになって取り除きはじめていた。このような崖崩れや道路外からの流れ込みによる土砂や礫の堆積は、道路の多くの個所で見られたが、規模は大きくない。また道路自体の決壊はなかった。ただ、子々川では地すべり的な崩壊があつて、道路横の擁壁と土砂が道路を約30mにわたって完全にふさいでしまっていた。幸いにもすぐ横に旧道があつたので、ここを通過して先に進むことができた。道路はこの様な被害を受けながらも、街灯は消えていない。私は日並付近で出会った琴海町の人と一緒に、ひたすら国道を歩きつづけて、琴海ニュータウンの自宅に着いたのは午前2時すぎであった。

翌日、主に長与町地域の水害の状況を見てまわった。とくに長与駅前では長与川の右岸部が

大決壊している状況や、道の尾駅前の大井手川にかかる橋に、流木などと一緒に、大破した車が7台も宙づりでひっかかっている状況を見て、大変驚いたことが思い出される。

7月23日夜に私なりに水害を体験して思うこ

とは、大災害の発生はラジオのニュースで9時半頃に知ったのであるが、もっと早く知ることができたらもっと安全な別の行動をとっていただろうということである。

### 長与町における被害状況（昭和57年7月24日朝撮影）



1. 材木などがひっかかった国鉄の鉄橋と長与川



2. 高田川の増水による国鉄長崎本線の被害状況



3. 池原付近における長与川の増水状況



4. 自動車、材木などがひっかかった上道の尾橋